

ほなひ歴史通信

第73号
2014.12.1

人口減少問題にどう向き合うか

—「消滅可能性都市」 大子町の行方—

「少子化」と「高齢化」、今や聞き慣れた言葉です。年間の出生数の減少に歯止めがかからず、また人口ピラミッド（年齢別人口構成図）で男女とも厚い層をなすいわゆる団塊の世代を中心に高齢者が年々増え続けるなか、「少子化」「高齢化」は日常用語化したと言っても過言ではありません。「少子化」傾向の継続の結果でもありましようが、国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」と略）の推計によれば、今から三十四年後の二〇四八年には、日本の総人口は一億人を割って九九一三万人にまで減少するとみられています。こうした人口減少が日本社会に何をもたらすのか、今にわかに注目を集める問題として浮上しています。

そのきっかけとなったのが、増田寛也氏（前岩手県知事、元総務相）を中心とする研究グループの一連の報告であり、とくに大きな反響を呼んだのが、月刊誌『中央公論』（本年六月号）における「消滅可能性都市八九六」自治体の公表です。増田氏らは、社人研の市区町村別人口推計データを元に独自に試算し、二〇一〇年から四〇年までの間に「二十〜三十九歳の女性人口」減少率が五割以上に達する八九六自治体（全自治体の約五割に相当）の市区町村名を明らかにしました。そしてもう一つ、八九六自治体のうち、二〇四〇年時点で総人口が一人を切る市町村が五二三にのぼり、これ

らは「このままでは消滅可能性が高いと言わざるをえない」と断じたのです。このレポートが全国の自治体に、とりわけ「消滅可能性都市」リストに載った自治体に少なからず衝撃を与え、多様な議論を惹起することになります。ちなみに茨城県では、前記女性人口の減少率が五割以上を示す自治体が一八市町、そのうち総人口が一人を切るのが大子町、河内町、五霞町の三町です。

さて、その大子町。女性人口の減少率が先の三町のなかでは最も高い七二・六%に及び、総人口は九五〇三人にまで減ると推計されています。まさに、増田氏の言う「消滅可能性が高い」都市に該当することになるわけです。推計方法や「可能性」とは言え「消滅」と断定することに対する疑問が提示されていますが（例えば、月刊誌『世界』本年十月号参照）、ともあれこうしたレポートの公表を奇貨として捉え、改めてまちづくりの考え方や施策の枠組みを問い直すことが求められているように思えてなりません。

レポートを執筆した増田氏自身、次のように述べています。「この現実を立脚点として、政治・行政・住民が一体となり議論し、知恵を絞る必要がある。徒に悲観することはない。未来は変えられる。未来を選ぶのは私たちである」と（前掲『中央公論』一八頁）。この指摘には同感です。何もしなくても地域は変わっていきます。地域が変わることを拱手傍観し受け入れるのではなく、地域を変えていく、変えることができるとの確信を地域住民の間で共有することが、先ず出発点だと思えます。そのうえで、「消滅可能性が高い」と位置付けられた大子町に即して言えば、地域の魅力を一層高めていくための課題や方策に行政と町内各層の住民が取り組む協働の仕組みをつくり、定着させること、町の外との交流を活性化させることを前提に「外の力」を束ねてまちづくりに結びつける仕組みを工夫することが少なくとも欠かせません。その方向での積み重ねのなかでこそ、「消滅」ではなく「持続可能な」将来像への転換を切り開く道筋がみえてくると考えています。（齋藤）

大子町・鎮守の杜（四）

越方神社（大子町相川越方一〇一）

高根信和

押川は一級河川である久慈川水系の支流のひとつで、栃木県境の花瓶山の西方に源を発し、境明神峠の北側で本県に入り、大子町で久慈川に注ぐ延長約二五・三キロメートルの長さの川である。浅川、初原川、相川川の三支流を有している。

支流の相川川は、大子町の南端の相川新田から流出し下金沢付近で押川に合流する。杉の人工林の間を流れ、川幅は狭く、川沿いには道路と並行して集落が点在している。

国道四六一号線を大子から栃木県馬頭方面に向かい、依上小学校を通過して相川バス停の信号を左折、県道一五八号（上金沢栃原線）に入る。相川集会所を過ぎると右手にシダレザクラの看板があり、神社前は道路改修によって道路幅が広がっている。

山側の山腹から湧き出る水は四季を通して涸れることがなく、「神水」と呼ばれている。道路側に、越方神社の社号標がたつ。

相川川にかかる朱塗りの太鼓橋を渡り、両部鳥居をくぐると境内に入る。神社の外郭の門である天保六年（一八三五）建立の随神門がある。隨身姿の二神の像（ここでは絵画）が安置されている。この神は、俗に矢大臣・左大臣という。もとは仏寺の二王にならって構えたもので、門の拝殿側には石造の仁王像が一対置かれている。

石段を登ると、両側に平成九年奉納の石燈籠が二基建っている。拝殿の両側には直径約一メートルの古い切株が残されており、御神木であったと思われる。境内は杉林で杜をつくっている。拝殿は流造、間口三・五間、奥行二間五尺、本殿は流造、木羽葺の屋根、方一間である。本殿の両側には霊付神社、八幡宮の末社が並

んでいる。祭神は経津主命（ふつぬしのみこと）・大己貴命（おおなむちのみこと）で、五穀豊穡の神であり、麻疹除けの神でもある。社伝によると大同年間（八〇六〜八一〇）の創建、上相川、上郷の鎮守で、三輪神社を慶長十八年（一六三三）に越方の神に合祀し、越方神社となった。神紋は左三ツ巴紋である。

神社に伝わる信仰としては、麻疹予防の神として近郷近在から熱い信仰が現代にまで伝えられている。麻疹は、発熱、身体中に広がる紅色の斑点の発疹、鼻や喉の炎症や結膜炎を伴う急性感染症で、五、六歳までの幼児に多くみられ、感染力は強いが一度かかるとほとんど一生免疫を得るといわれている。

麻疹予防を願う母親たちは子どもを連れ、相川川にかかる神橋を初めに渡り、橋のたもとから川に下り、橋げたをくぐり、また上がってくる。これを三度繰り返すことによって麻疹を防ぐことができ、万が一麻疹にかかっても軽くすむと信じられている。子ども連れの母親が、この山深い社に参拝する。子どもを病魔から守ろうとする母親の姿が浮かび、霊験あらたかな雰囲気をもたらし、

（元茨城県立歴史館学芸部長）



越方神社の社号標



神橋の下をくぐる

私の太平洋戦争記 (二)

野内泰子

毎日のラジオ放送や新聞は、日本の戦いの模様をアメリカ・イギリスの空軍機○機撃墜とか同国軍艦を撃沈などと伝えた。この頃、アメリカ極東軍司令官マッカーサーは、後退を余儀なくされフライピンを脱出、オーストラリアへと撤退している。

しかし、こんな他人事のような状態は長くは続かなかつた。食糧事情も悪くなり味噌・醤油も割当制となり、それより以前から米も配給制となっていた。また、衣料品も切符制となった。この頃、全婦人団体が統合され「大日本婦人会」が発足した。女性の長着姿が非難されるようになり所謂「標準服」が奨励された。

当時、四歳上の兄は中学生になっており、電車通学となった。それを機に腕時計や万年筆を父に買ってもらい、この時点では食料や衣類以外のものはまだ、手に入ったように思う。

中学では、英語が正課だったがこの頃になると、英語は敵国語だということでも習うことも制限されるようになった。けれども、兄の中学では正課になっており父も外国を知ることには、先ず、言葉を知ることだというのが持論だったようである。家庭教師を頼むことになった。

ちょうどその頃、医科大学を卒業して医者になったばかりの従兄弟が、仕事が休みの土曜か日曜に来てくれることになり、その日には、大きな声で英語の本を朗読する声が何時間も続いた。英語は声を出して読んだり話したりしなければ身につかないというのが、従兄弟の持論だった。おかげで、小学生のわたしも、隣に座って大声で暗唱のまねをした。

しかし、この従兄弟もやがて、あまり来られなくなった。というのは、軍医となったからである。戦争末期のころには、戦艦

「長門」の軍医として乗り組んで南方戦線に向かった。幸い長門は戦火に遭うことなく終戦を迎えた。従って従兄弟も無事であった。因みに、この長門は、太平洋戦争終結後、アメリカが行ったビキニ環礁での水爆実験の際、水爆の威力を試す実験に使用された。水爆の力が最も及ぶ中心部にこの艦が置かれ、その周囲にアメリカの軍艦等が並べられて実験が行われたが、周囲に並べられた艦のごとくは木っ端みじんに破壊されたが、この長門は沈没しなかったそうである。

そんなことがあったが、あまり日常生活に変わりがあったようにも思えなかった。しかし、それは、子どもの目に映らなかつたというだけで、着々と国民皆戦争への足並み揃いつつあつたのだろう。後で思えば、裏の飛行場から発着する飛行機の数も心なしか増えたようにも感じられた。

引越し・転校

昭和十八年七月、我が家は引越すことになった。

その年の二月、日本軍はガダルカナル島から撤退を開始した。開戦からしばらくは、日本軍の南方への進攻はめざましいものであったが、何しろ相手は強大な国家、資源もなく小さな島国である日本は長期戦になれば不利なことは目に見えていた。一度はオーストラリアへ撤退したアメリカ軍も態勢を組み直し反撃へと移った。

我が家のすぐ裏は入り江になっており漁師の家も多かったので、小さな漁船が係留してあったが、その向こうは横須賀海軍航空隊の基地で飛行場が広がっていた。戦争の激化とともに飛行機の発着は昼夜を問わず激しくなり、入り江を埋め立て、それに続く民家のある地区も飛行場拡張の計画とともに立ち退きとなったのである。(次号へ続く)

(大子郷土史の会)

大子町城館跡探訪五

野内智一郎

五 下金沢古館跡（大子町下金沢字古館一四四二外）

大子町の西部、大子町下金沢字古館に下金沢古館跡は所在する。常陸大子駅や大子町役場が集まる大子町の中心地から国道四六一号を西の栃木県方面に押川を遡る形で進むと、水田や宅地が続き、しばらく行くと右手に大子町立依上小学校が確認できる。当該地はこの依上小学校の南、押川対岸の丘陵上に比定されている。押川から急勾配で上がっており、丘陵の上は標高一六〇m前後で、まばらな住宅の奥には畑が広がっている。この、比高八m前後の台地上が下金沢古館跡の比定地である。現在は畑地と民家があるのみで、踏査では館の跡の遺構は確認することができなかった。今は、「古館」という字名と『水府志料』や『新編常陸国誌』の僅かな記述からしかこの地に館があったことを裏付ける情報はないが、国道からみるといかにも台地の縁辺で守り易く、館を構えるには適地であったことが想定できる。

六 下金沢未城跡（大子町下金沢字未城一〇六八外）

大子町の西部、大子町下金沢字未城に下金沢未城跡は所在する。国道四六一号を那珂川町から大子町の中心に向かって進むと、左手に大子町立依上小学校が確認できる。そこから南東方向に確認できる丘陵が下金沢未城跡比定地である。比高は十m近くはあるうか、下金沢古館跡と同じように急激に上がっている。城館跡の北側には押川が流れ、水田が広がる山田地区方面を木々の間から広く見渡すことができる。現在は畑地がそのほとんどを占め、民家がまばらにあり、切岸とみられる丘陵縁辺部には木々が密集し、一部墓域を含む。南にもある程度平面が続き、畑地となっている。

航空写真では東と西にそれぞれ曲輪とみられる丘陵がみられるが、踏査した限り、切岸以外に目立った遺構は確認できなかった。主郭西の坂は堀の跡を利用した可能性があり、城跡と思われる大部分は住民の生活の中で変容・埋没していると考えられる。今は、下金沢古館跡同様に、「未城」という字名と『水府志料』や『新編常陸国誌』の僅かな記述が頼りとなる。城跡としては、今まで紹介してきた諸城よりも規模が小さく城としての機能がどこまで果たせていたのかは疑問が残る。

今回、下金沢に所在する城館跡を二つ紹介した。下金沢古館跡と下金沢未城跡は1kmも離れていない位置に立地しており、互いに関係が深いものと考えるのが自然である。これだけ近いので任されていた氏族は同一で、館主や城主は不明であるが、日常の生活を古館跡でいとなみ、緊急時や非常時には未城跡へ拠った、と考えることはできないだろうか。下金沢を含む依上地区には、大子町で確認されている二十九の城館跡のうち、九つもの遺跡が確認されている。今の区分けをそのまま中世の城館を検討するのに用いるのは危険もあるが、九つもの城館跡が存在するのは大子町の地区の中で最多である。このように多くの城館跡をこの依上地区に築いたのはやはり、この地区の金資源確保ということが大きいと思われる。防御のための城と、金を産したということが管理運営するための人員を配置する必要があったと思われる。大子町と境を接する那珂川町（旧馬頭町）は「古代採金の里」とされており、奈良時代の天平十九年（七四七）に大仏鑄造が始められた際にこの地の金が献上されたという。以後、この地域も長く金を産出した。領地を接する佐竹氏と宇都宮氏は、このように、特異な地域を所有しており、時折関係が緊張した。そのような政治的背景を補足することができる。

（龍ヶ崎市在住）

明治四十年、池田尋常小学校の学校生活について

明治三十七年（一九〇四）二月から翌年九月にわたって日本とロシアの間で戦われた戦争を日露戦争といえます。たくさんの戦死者を出し、戦後の不景気で農村は非常に苦しみました。その頃、大子地方では、明治四十年十二月七日一町外七か村組合立大子農学校の入学式及び開校式が挙行され、六十四名が入学しました。

そのような時代の小学校の様子を、茨城県立歴史館に架蔵されている「池田尋常小学校沿革誌」から紹介しましょう。

明治三十九年度末における「児童数は男十九、女三十六、計五十五、明治三十九年度授業総日数二百四十七日」です。明治四十年一月一日に、「四方拝式挙行後、明治三十九年中精勤児童二十五名に賞状授与：無欠席者六名には半紙百枚宛を賞与」しました。

二月三日、「昨今、時候不良の為めか児童中風邪に罹るもの非常に多数に上り皆欠席療養中、悪性の感冒、大に注意を要す」、二月十日、「家庭訪問をなす、其方面は下坪にして十九戸なりとす」、二月十四日 菊池外十名の家庭訪問をなす。先生方は、児童の健康を気遣い、家庭訪問をしています。

二月十八日、「父兄談話会開催、午前は児童の談話、午後は来賓其他の演説談話あり、余興として福引あり、夜に入りては幻灯を催し、十一時三十分散会せり、父兄の会するもの三百余名」、三月十日、「袋田村軍人勲章授受者披露式に児童一同を引率して午前七時出校、袋田尋常高等小学校の式場に出張、煙火、手踊の余興あり」。当時、袋田村には袋田校、池田校、下津原校の三校がありました。「三月二十三日 本校第十五回卒業学習証書授与式を挙行」、当時の尋常小学校は第一学年から第四学年まで、男三、女七の計十名が卒業しました。四月一日に入学式を挙行、「新入学児童 男七 女八 計十五」です。

五月四日、「欠席勝なる益子、石井等に研究的に特別教授を開始

せしは先日でありき、爾来引続き之れに熱中し着々其歩を進めつつあり、幼児を背負ふて之を看護しつつ傍ら教授に専心力を注ぐ、可憐なる此等数名の児童に対して豈に一掬同情の涙なからんや、岡村捨之介早起、始業時間前に或は終業後に、昼食後の休憩中に、孜孜當々、腐心しつつあり、此苦心経営、豈に徒勞に帰すべけんや、必らずや、他日、是れか効果の燠然、頭はるるの期あるべきを信ずるものなり、当区の子守男女五、六人来り遊び居りしに依り、終業后、子守唄を教授し、仮名授業をなせり、児童は皆喜びて帰り去れり」、岡村校長兼訓導は、子守りの児童たちにかな文字や子守歌を教えてください。

五月二十日、「本年度児童、害虫駆除（苗代螟蛾、螟虫卵）に付、打合せの為め、岡村校長、袋田村役場へ出張す」、明治三十七年には六月一日から十八日までに、卵総数五万一千八百七塊、蛾一万二千四百二匹を採集駆除しています。

六月五日「時方、盛農期なるに係らず出席児童左程減少を見ず」、七月七日（日）「岡村校長、家庭訪問及欠席児童督促の為め本日前七時より下組へ出頭す」。岡村校長は家庭訪問をしています。

九月二十一日、「今宵より卒業生及在学児童十数名相図り夜学会開催、午後五時頃より降り出せる雨は夜に入りて益々強きを加へしも熱心なる青少年は勇躍集ひ来りて午後七時半開会、岡村校長夜学会に就ての諸注意并に希望を述べ各生読書算の練習をなし次に再び岡村校長一時間余に亘る講話をなし午後十時閉会す」、九月二十七日の夜学会では、国語、漢文、珠算を教えています。

十月二十九日、「東京早稲田大学校政治経済科第三年生益子逞輔（久野瀬出身）来校參觀す」、勉学の励みになったと思われます。

十月三十日、「教育に関する勅語を下賜せられたる記念日なるを以て児童一同を会し聖旨の在る所を誨告す」、十一月七日、「本校児童を引率し東白川郡高城村大字内川なる矢祭山に遠足す、午後五時無事帰校」。矢祭山まで歩いたのでしよう。（野内）

第二回ふるさと歴史講座（現地巡り）の開催

今年の第二回ふるさと歴史講座（現地巡り）は、「大子の絵馬を巡る」というテーマの下、大子町内の神社に奉納されている絵馬や奉納額を見学することにより、郷土理解や文化・伝統の保護・継承について理解を深めることを目的として、平成二十六年九月二十八日（日）に開催いたしました。

絵馬とは、祈願または報謝のため社寺に奉納する絵入りの額や板絵のことで、生きた馬を奉納する代用として馬の絵を描いて奉納したことが現在の絵馬の起源とされています。

今回の日程は午前九時に中央公民館を出発し、まず、花火筒の奉納された小生瀬の諏訪神社ではその花火筒で花火をあげている絵の描かれた絵馬を見学しました。その後六点もの絵馬が奉納されている高柴の五霊神社、大子出身の江戸時代の流行詩人大窪詩佛の書いた神名掲額がある内大野の十二所神社、さらで有名な浅川の熊野神社、途中に広域公園でお昼休憩し、午後は、羽黒八景を詠んだ俳額がある上金沢の羽黒神社、有名な小野道風と蛙の教訓話を描いた絵馬がある相川の越方神社、陰と陽を表した二つの天狗の面が張り付けられた絵馬がある栃原の鹿島神社、「根渡」の名前の読み方の一つに「にわとり」があることから描かれたであろう鶏の絵馬がある大沢の根渡神社、迫力のある狛退治の絵馬がある下津原の薬師堂という盛りだくさんの内容でした。

講師は大子郷土史の会の野内泰子さんです。野内さんは大子郷土史の会で、郷土の歴史文化について研究され、「大子の歴史散歩」「大子の石仏」などの本などで、研究の成果を発表されてこられました。昨年度、文化遺産を活かした地域活性化事業の補助を受け「大子の絵馬」についての調査報告書を発行されました。講座

の中で長年の研究の成果や調査当時の苦労話なども交えて熱心に解説してくださいました。

また、今回の講座の中で、神社の拝殿の中に入って絵馬を探している野内さんも調査の時に見たことのない絵馬が発見されました。その絵馬は浅川の熊野神社の拝殿の奥にひっそりと隠れていました。絵馬の背景には富士山と飛んでいる二羽の鶴が描かれ、サーベルを持った軍人二人が椅子に座り、着物を着た人物が地面に刀を置いて正座をしている様子が描かれています。左端には明治十二年巳卯三月吉龍と書かれています。どのような場面を描いたのかは分かりませんが、軍人に降伏している場面のようにも思えます。詳しく調べてみたいくなりました。

絵馬は現在では奉納する人も減り、忘れ去られてきていますが先人たちが願を託し、当時の時代背景などが分かる貴重な文化財です。まだまだ大子町には隠れている文化遺産がたくさんあるのではないのでしょうか。大子町の魅力をまた一つ見つけました。

（家田）



熱心に解説を聞く
受講者の皆さん→



上金沢の羽黒神社には
大きな絵馬がたくさん
ありました。



浅川の熊野神社
新発見の絵馬 →

第二回ふるさと歴史講座に参加して

大子町大子在住 益子一男

雲の切れ間に初秋の青空が広がりゆく中、大子町の絵馬を現地に巡る講座に参加する機会に恵まれました。公用バス一台の制限もあり、案内の野内泰子先生を始め十九名の参加者です。

小生瀬諏訪神社を皮切りに下津原山根の薬師堂までの九社を見学する行程です（昼食・休憩は大子広域公園）。社の建造物の多くが急な階段を設けた場所にあるため、参加者全員歩行もおのずと真剣な表情になりました。

社の起こり、そして絵馬とは何か、配布されたパンフレットを手で現地各社をそれぞれ二〇分程度の見学時間です。社の起源は文化史の文献等によれば当初は建造物は無く、村人の集合する「聖地」であり、現代における五穀豊穰、無病息災を祈願した所です。時代とともに社の変遷は当然ですが、これらを背景として絵馬の存在があり地域の風土文化として現在まで息づいているのでしょう。また野内先生の車内での補足説明によれば絵馬の由来は、参拝・祈願する際に生馬を献上する習慣であり、後世に略儀として生馬が絵馬に変化したものであるとの事です。天災や病気等、神仏に祈るしか方法のなかった時代の民衆生活史の断面を考察できたこの講座は、参加者一同にとって有意義な学習時間でした。企画に努力されたスタッフの方々に感謝いたします。

大子町山田在住 笠井敏子

今回の「大子の絵馬を巡る」という募集案内に、大子に絵馬巡りをする程の絵馬があるのかなという疑問を感じました。

九月二十八日、絶好の天気にも恵まれ、九時に公民館を出発し、一路小生瀬の諏訪神社に向かいました。まず、境内で講師の先生

方のご紹介の後、野内泰子先生から絵馬についての説明があり、その中で大子町に八十一一点の絵馬が現存していると伺い、びっくりしました。諏訪神社の絵馬は花火の絵馬で、二〇〇年前の文政年間のもので、色が褪せているのが残念です。本殿の外に掛けられており、何とか保存の手が打てないかと思いましたが、

次は高柴の五霊神社で、ここには六点があり、本殿内に掛けられている他にきちんと片付けられていました。浅川の熊野神社、上金沢の羽黒神社にも六点ずつあり、いずれも百五十年前から、大正、昭和初期のもので、絵額や字額が神社ごとに大切に保存されておりました。

小生瀬の諏訪神社、高柴の五霊神社、内大野の十二所神社、浅川の熊野神社、上金沢の羽黒神社、相川の越方神社、栃原の鹿島神社、大沢の根渡神社、下津原の薬師堂と九カ所を巡り、三時半に帰着しました。すべての神社の境内はよく手入れされ、本殿はサッシ戸がつけられて、氏子の方々の信仰心の厚さが感じられました。特に大沢の根渡り神社に伺った折り、若い御夫婦が赤ちゃんを抱いて来られ、「お食い初めに使う石を借りに来ました。」と神社にお参りしている姿に、神社と人々の心の結びつきの深さが感じられ、心が暖かくなる思いでした。

静まり返った杉木立に心洗われ、清々しい気持ちで見学を終えさせていただきました。次の機会にもまた素晴らしい企画を立てて下さる事をお願いいたします。ありがとうございました。



熱心に説明する野内先生



沢山の絵馬が飾られていました。



根渡神社の小野道風と蛙の絵馬

金魂祭 — 文化財を活かした地域おこし —

金町若連

金町若連は、去る平成二十六年十月十二日(日)に、金町活性化震災復興イベント「金魂祭(きんこんさい)」を開催した。これは、過疎化や東日本大震災により活気を失いつつあった金町の活性化を図ること、金町の魅力を広く発信すること、金町区民同士の絆を深めることを目的としたイベントである。

金魂祭の特徴は、金町の文化財が、有形無形を問わず、イベントの題材として活用されたことである。具体的には、金町屋台の彫物や屋台幕、金町の歴史に関する資料の展示、金町小屋台の巡行、お囃子の演奏、手踊りの披露などである。金町の文化財をイベントの題材として活用したのは、金町にしかできない方法で金町を活性化させたいという想いが金町若連にあったからである。金魂祭は、金町若連にとって初めての試みだったが、多くの協力を得られたことで、多くの方々に来ていただき、楽しんでいただけたなど、大成功を収めた。金町若連は、金町、延いては中心市街地の活性化を目指して、来年以降も継続して金魂祭を開催したいと考えている。併せて、他の地域においても、金魂祭のような文化財を活かした地域おこしが試みられることを願っている。



彫物と屋台幕の展示



金町小屋台の巡行



お囃子の演奏

編集後記

華やかな錦秋の奥久慈の賑わいも一段落し、冬將軍の足音が近づいています。

水郡線全線開通八〇周年の今年十二月五日から三日間SL運行があり、中央公民館で「町小中学校水郡線学習作品展」、文化福祉会館で「記念講演会」等多くの催事があります。師走とコラボレーションで活気あふれる街が演出されております。本年は、文化(財)面で当町では三月「常陸大子のコンニャク栽培用具及び加工用具一四六点」が国登録有形民俗文化財に、七月「旧上岡小学校」と「旧黒沢中学校」が国登録有形文化財に、十一月「袋田の滝及び生瀬滝」が国指定名勝に答申等がありました。一方、町指定文化財に七月「小生瀬地藏桜一株」九月「近津神社の中田植」の二件を指定しました。

本年は、「文化(財)」がクローズアップされ一段と輝きました。年の瀬にあたり、本誌を手にしております皆様で近未来のあるべき当町を想いながら「温故知新」の言葉を今一度噛みしめてみるのいかがでしょうか。

(齋仁)

編集 大子遊史の会

編集人 齋藤 典生(茨城大学教育学部特任教授)

野内 正美(茨城県立歴史館資料調査員)

齋藤 仁司(大子町教育委員会)

家 田 望(大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館

☎ 0295(72)1148